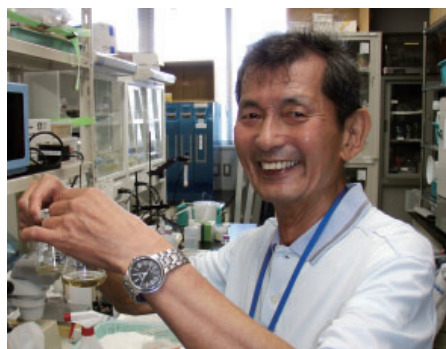


その背にぬくもりありて

水谷 泰久（大阪大学大学院理学研究科 教授）



北川先生（2013.9.26撮影）
（於、兵庫県立大学小倉研）

北川先生は、革装の三省堂『コンサイス英和辞典』を愛用しておられた。いつも机の横に置き、投稿論文の原稿を書かれるのが常であった。単語選びに迷う度に辞書を引き、最適な表現を探しておられたのだろう。使い込むうちに綴じ糸が切れてしまっても、テープで補修し、大切に使い続けておられた。しかし、韋編三絶の如く、それも限界に達したのだろう、同じ三省堂の辞書を新調された。私が新しい辞書に気づくと「これで何冊目かな」と微笑まれた。物を大切に使用されると同時に地道な努力をずっと繰り返して論文を書いてこられたのだと思うと、その照れた笑顔の奥からはむしろ凄味が伝わってきた。

北川先生は実験に使った試料をずっと冷蔵庫に保管しておられた。役目を終えた装置の部品もずっと実験室に残しておられた。「随分貧乏性だなあ」と僕は言っていたが、それらに深い愛着があったのだと思う。阪大時代から長年使われていた、JEOL社製のラマン分光計400Dもそのひとつである。迷光が少なく、低波数領域まで測定できるこの名機は、古くても優れた性能を誇っていた。この分光計はチャート紙にスペクトルを記録する。そのチャート紙を実験テーマ毎に丁寧に綴じて北川先生は保管しておられた。チャート紙をめくる姿はまるで愛読書を紐解くようで、本当に楽しそうだった。

北川先生は常に人に丁寧に接し、頼まれたことを決して後回しにされなかった。私が北川グループの助手だった頃、出張前の先生に原稿を渡すことがよくあった。移動中の新幹線の中で読んでいただけるのではないかと期待してのことだった。しかし、学生を指導する立場になって、それが決して容易ではないことが今ではよくわかる。先生には車内で済ませたいこともあっただろうし、帰りの車内では疲れて休みたかったはずだ。それでも、先生は決して嫌な顔をされることなく、出張後には原稿を返して下さった。余白には小さな文字でコメントがぎっしり書き込まれており、「新幹線の中で書いたので字が読みにくくて申し訳ないけど」と言いながらいつも手渡してくださるのだった。

先生からの年賀状には、毎年欠かさず丁寧な激励の言葉が書き添えられていた。それは単なる一言にとどまらず、「○○の論文を読みました」「次は△△ができればいいですね」といった、こちらの歩みをしっかり見てくださっている具体的な内容だった。しかし、ここ数年は体調に関する言葉が少しずつ増えていた。気にはなりつつも、深刻なご様子には思えず、どこか安心していた。今年の年賀状もそうだった。そしてその翌月、思いがけない悲しい知らせが届いた。先生はご逝去のわずか数日前、豊田理化学研究所で行われた研究フェローによる研究報告会に参加されていた。その日の行事が終わりホテルの部屋に向かわれる先生に、研究所の秘書の方が「お疲れ様でした。ゆっくり休んでください。」と声を掛けられたところ、「まだ少し勉強してから休みます」と仰ったとのことである。北川先生ならそうだろうと頷かれる方は多いと思う。

岡崎国立共同研究機構が自然科学研究機構へと名称を変えた際、「名前から岡崎がなくなってしまって寂しくなりましたね」と私が言うと、先生は即座に「統合バイオ（岡崎統合バイオサイエンスセンター）にはまだ岡崎が残っている」と誇らしげに答えられた。京都で生まれ育ち、学生、教員時代を大阪で過ごされた北川先生であったが、岡崎という地を心から愛しておられたのだと思う。

研究を愛し、研究に関わる物を愛し、研究に関わる人を愛し、そして岡崎を深く愛された先生であった。

北川禎三先生の思い出 田原 太平（理化学研究所 主任研究員）

初めてお会いした大学院修士課程の頃から、助教授として分子研で一緒にさせていただいた7年間を含め、お亡くなりになるまで北川先生にはずっと目をかけていただきました。先生は生体分子、特にヘムタンパク質の共鳴ラマン分光の世界的権威で、その学風は一言でいうと「精緻」、複雑なスペクトルから生体分子の本質的な情報を引き出す研究は他の追随を許さないものでした。そのような泰斗であったにもかかわらず物腰は大変柔らかで、若輩の私も常に「さん」付けで呼ばれ、いつも優しく話しかけてくださいました。同時に反骨というか不屈というか、どこか古武士のような雰囲気を漂わせておられ、私は先生とお話しする時にはいつも自然に背筋がピンとなりました。何かの折に先生は若い頃に研究で随分苦労されたと聞きました。その経験が先生のお人柄の根っこになっていたのかもしれない。ですので、私にとって先生は優しくも怖い存在でした。今、私は生体分子の研究も行っていますが、これは先生や北川研究室の皆さんの影響によるところが大了。また昔、先生から分子科学の研究ネットワーク構想を伺ったことがあり、それが随分経って私たちが立ち上げた「柔らかな分子系」という新学術領域研究のヒントになりました。

分子研時代にジョギングをしていた私は、夕刻のジョギングを日課にしておられた北川先生を偶然見つけ、背中を遠くに見ながら走ったことがあります。黙々と走るその後ろ姿は先生の研究スタイルそのものでした。私の幸せは、何人か自分のロールモデルになる先生方に出会えたことだと思っています北川先生は間違いなくそのお一人でした。

北川先生と過ごした光の時間 久保 稔（兵庫県立大学大学院理学研究科 教授）

北川先生は、ラマン分光を一本刀に、生体分子分光の分野を切り拓かれた先駆者であり、私は北川研の最後のポストドクとして、先生から直接ラマン分光を学ぶ幸運に恵まれました。普段は穏やかで優しく接してくださる先生ですが、スペクトルを前にすると鋭い眼差しで議論に臨まれるお姿が今も私の記憶に鮮明に残っています。先生は分子研をご退官後、豊田理研を経て、特任教授として兵庫県立大学の小倉研究室で研究活動を継続されました。このときも、私は同研究室で再び先生とご一緒するご縁に恵まれました。ヘモグロビンのアロステリーについて、 α 鎖と β 鎖を区別しないといけないが、MWCモデルはそうっていないと、熱を込めて語られていたことを覚えています。また、サックスを始めたんだと笑顔で楽しそうにお話しされていたお姿も懐かしく思い出されます。「振動分光はシャープに使いなさい」という先生のお言葉は、これまでも、これからも、私にとって大切な指針であり、北川先生との出会いがなければ今の私はありません。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

ラマンバンドの帰属に関する後悔 内田 毅（北海道大学大学院理学研究院 准教授）

この度の北川先生のご訃報に接し、心より哀悼の意を表します。私は博士研究員および助手として約5年間、北川グループに所属し、その間、研究者として多くの薫陶を受けました。今回はその時のエピソードの一つをご紹介します。

2005年に論文を投稿した際のことです。投稿直前、北川先生は 1471 cm^{-1} のバンドの帰属に静かに疑問を呈されました。ヘムのスピン状態を反映する ν_3 バンドがこの付近に現れますが、 1471 cm^{-1} という値は ν_3 としては低すぎる値でした。しかし、他にこの位置に現れるバンドがないため、6配位の低スピンの鉄イオンに由来すると帰属して、投稿しました。その数ヶ月後、校正刷をご確認された先生は、再度、このバンドの帰属は大丈夫ですか、と咄かれました。私は、確証がないにも関わらず、その場を曖昧に収めてしまいました。それから約一年後、共同研究者の試料を測定していた際、再び 1471 cm^{-1} のバンドに遭遇しました。慌てて共同研究者と議論をした結果、このバンドは ν_3 ではなく、グリセリン由来のものであることがわかりました。北川先生からの二度にわたるご指摘を軽視して、誤った帰属をしていたことを深く恥じました。常に細心の注意を払われスペクトルをご覧になっていた先生の姿勢は、その後の私自身の研究と学生への指導において、かけがえのない教訓となっております。